

定年俳句誌

12 2012年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(十二)

佐藤喜仙

そこはかと十月桜雨催

曇天に尖塔の高くしだれ萩

草原に風徑まざと野分晴

朝顔の紺にじむほど垣に垂る

きちかうの雑草を統ぶ紫紺かな



略歴は二ページの子規星流る

秋暑し水遣る人と語を交はし

秋彼岸過ぎるやブーツの女の子

どの木からともなきさやぎ秋の声

かまつかや朱塗りの門の中華街

読みかけの本に染みある夜長かな

子規わめく糸瓜の庭にちちる虫

かきね集

白選句集



「秋の声」

松本周二

「運動会」

古川千鶴

すつぽんの首伸ばしけり秋の声

晴天や笛に始まる運動会

石露咲きて庭の片隅照らしけり

指させば音の途切れて鉦叩

紫蘇の穂や湯気の立ちたる畑の土

一湾の島浮き上がる稲光

式部の実懐古のことの増えてきし

山葡萄石積み造り農具小屋

新生姜薄紅色の夕焼け雲

川添ひの湯宿の二軒吾亦紅

朝霧や人の動きと警笛と

金色のからくり時計黄落期

「刈田」

川井素山

「除夜の鐘」

菅原

孟

鷺一羽歩む刈田や佐渡の海

黄金の波かしぐ案山子の越後平野

台風去り漁夫の寄り合ふ船溜り

さまざまな木の実ふみ越え分水嶺

虫すだく夜半の厠に織の音

夕潮に秋冷いたる遊覧船

瀉の朝暁の白鳥丸くなり

木の枝の小熊はパニック上高地

頼朝の日向ぼつこや源氏山

冬の浜さらりきらりと朝日さす

一木に集ひお喋り寒雀

除夜の鐘終の一つに汽笛鳴る

「みみず」

安藤虎醉

蚯蚓鳴く爺やと我を呼ぶごとし

蟪蛄の獲物に挑む身の構へ

金木犀シヤネルに劣らぬ香りかな

風鈴の音色響ける露地の中

晚酌に何はなくとも冷奴

朝顔を押し花にして葉とす



撫子集

主宰選



田島昭久

ひつそりと咲いて黄色の曼珠沙華

ノーベル賞報道に沸く秋の夜

色変へぬ松と向き合ふ書齋かな

声の主變りて森に青松虫

誕生日の祝ひの言葉孫等から

さはさはとすすき揃ひて池の端

色変へぬ松従へし帝釈天

じんわりと立木を覆ふ烏瓜

一晚に咲き揃ひたる曼珠沙華

昨夜の風銀杏匂ふ学府の庭

本郷宗祥

米田文彦

風止みて香の漂よへり藤袴

白萩の柔らに肩にかかる風

祠への径に点々水引草

くたぶれて座る茶店や吾亦紅

竜胆の色際立てり雨の庭

小池清司

秋鯖の背に黒潮の匂ひけり

新蕎麦に蘊蓄そへて啜りけり

園丁の手許忙し秋日かな

友垣にふと逢ひさうな柿の村

小河内に湖底村あり芋名月

風強き台風一過深呼吸

岡野安雅

彼岸花酔ふほど話弾みけり

微笑みて総理の胸に赤い羽根

山澄むやカラスの群れの声高く

六甲のケーブル乗るや秋の空

名月を過る黒雲城址の宴

小林美登里

故郷の庭の朝顔濃むらさき

夏暁や色を帯びゆく山上湖

濠の水ひらひらとせる小暑かな

古池や木陰を過る川とんぼ

名月の山の裾より登りくる

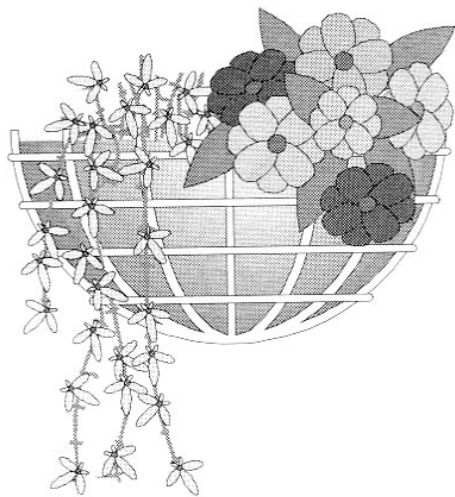
山本達人

秋の野は千変万化色の壺

さわやかや朝の光の目にあふれ

金箔を浮かべちらつく秋の海

秋雨の水面にぎはし日かな降る



那須野集

主宰選



秋の虹トランペットが胸で鳴る

長久保郁子

赤貝のひもで熱爛外は雨

丸山酔宵子

秋の雨ジオラマに空なかりけり

嵐去り雲散り路地に秋の月

白木槿アパートのドア並びをり

年輪を重ねし皺や秋の暮

問ひかけに葡萄ひと房かかげらる

雨上り稲架に一羽の烏かな

校庭の隅で鶏鳴く冷え冷えと

嵐去り前山の闇星ひとつ

畑に見し今年最後の秋の蝶

青木英林

夕映えの刈田に残る稲穂の香

池内とほる

士の香をまとふたままの落花生

部屋干の臭ひ払ふや雨後の月

秋深し同期が集ふ古希の旅

ひこばえのなびく平野の果てに海

晴れ渡る過疎の村にも秋祭り

力なき秋雨に濡れ柏崎

落ち鮎の赤腹見せて川下る

駅裏で濁り酒囃む暮の秋

雨上り仲間求めて秋の蝶

後藤克彦

夕闇に色を無くしけり曼珠沙華

柳田皓一

野仏のまはり一面杜鵑草

唐突に庭隅に生ふ曼珠沙華

コスモスの乱れ咲きゐて道隠す

色褪せて命の果つる曼珠沙華

平成や少なくなりし運動会

古希といふ世に古びけり曼珠沙華

立秋の日指し柔らか簾取る

曼珠沙華彼岸此岸を赤く染め

蒼穹を糸曳きて飛ぶ鬼やんま

橋本修平

枯野への一里塚なり花芒

長島清山

秋の田を韋駄天のごと風走る

月出でてはるかに眺むスカイツリー

鶏頭を見るたび浮かぶ綾子の句

秋刀魚焦げみやこの隅の宴かな

今年また効果なかりし鳥威し

秋風や今夜めでたきノーベル賞

鳥さへもすぐに見破る案山子かな

百年は生者に長し空に鷹

いずこへかひらりひらりと秋の蝶

吉田博行

孫娘追ひ掛け写す運動会

菊地崇之

月光に青く浮立つ大氷河

秋の蝶木漏日の中ヒラヒラと

稲刈りの煙たなびく秋の暮

秋日和吟行会へ足早む

くらやみのトンネル出るや秋たかし

見上ぐれば染みゐる青に秋の雲

かたまりて炎のごとき彼岸花

濡色や囲碁の帰りの後の月

稲束の三角錐に並びけり

和田勝信

同じ向き倒るる稲の野分かな

新しき刈田に残る轍かな

秋澄むや筑波嶺黒く土手の上

稲妻や蔓草覆ふ古レール

散歩道木の実二つを捨てかねて

田中清秀

秋澄むや茜の空の鳩の群

夕暮れの茜に染まる花薄

子供のせとんぼと走る豆電車

草叢の紫花に秋の蝶

秋風に葉裏ゆるるひかりかな

森岡陽子

芋洗ふ手にぬるぬるとにほう土

やまおろし網にはみ出る栗のいが

秋澄むや静寂の夜の時計音

秋風に髪の毛ゆらし後ろ影

撫子集・那須野集鑑賞 八月号より

客員 村上克哉

撫子集

風に揺れ道の辺おほふ猫じやらし 本郷宗祥

各地の空き地や道端などいたるところで、誰でも一度は見かけたことのある身近な野の草。茎の先の長さ6〜9センチ程の緑色の花穂は子犬の尾を思わせるので狗尾草の名もある、この穂で猫をじやらせるのに用いることから猫じやらしの別名がついた。道端を覆うほどの花穂が揺れている何処にでもある、つい見逃して仕舞いそうな事柄を気負わず句にして愛らしい。

打ち水の柄杓で道を教へられ 小池清司

夏の暑さ埃っぽさをしずめ涼しくさせるためバケツや手桶に、柄杓ホースなどで水を撒く。灼かれた道が打水で清められ涼感を呼び、暑さから解放され、ひとときの安らぎが蘇る。街道か街角で道を尋ねたところ打水の手を休めず柄杓で道順を覚えてくれた。如何にも土地の人らしい打水の情景が目につかぶ。

飛び跳ねし姿彷彿鮎料理 米田文彦

塩焼き、田楽、洗膾、フライ、雑炊などさまざまな鮎料理がつくられるが、何ととっても子持ち鮎の踊り串は格別だ。川魚の王、女王とも呼ばれ早春に成長して川を遡り堰を飛び跳ねる姿は美しい。丁寧に串を打ち化粧塩を打ち、囲炉裏に刺して焼いた踊り串を思い浮かべる。如何にも美味しそうだ。

山上湖湖畔に据うる籐寝椅子 小林美登里

榛名湖か芦ノ湖か、榛名湖がいい。榛名富士を眺めつつ籐寝椅子に憩う夏の午後。映画の一シーンをみるようだ。籐の茎や皮などで編んだ寝椅子はひんやりと冷たく見た目にも涼しい。浴衣がけで寛ぐ一寸贅沢な気分のひととき。

風鈴や診療終へてくつろげり 岡野安雅

夏の医院の診療はしんどい。夏休みで子供の患者も多く気を使う。診療をやつと終え、ほっと一息ついた。折からの風に涼しげな風鈴の音色、鉄、陶器、ガラス音色は何れにしても涼やかで安らぎ寛ぐ様子が良く伺える。風鈴との取合せ自然。

伝言板

1 第十二回本部句会(原則第二金曜日)

- ①日時 2012年12月14日(金)
14:00～17:00
- ②場所 目黒区「下目黒住区センター」
3階会議室〔別添地図参照〕
- ③投句 当季雑詠 5句
- ④会費 1000円

2 第十三回本部句会

- ①日時 2013年1月11日(金)
14:00～17:00
- その他事項は第十二回に同じ

3 第十二回吟行(原則第四火曜日)

- 日時 2012年12月25日(火)
13:30～15:30位
- 場所 新宿御苑
- 集合 新宿御苑正門前
- 入場料 各自負担 200円

4 第十三回吟行

- 日時 2013年1月22日(火)
- 場所 小石川後楽園

所在地
交通

文京区後楽1-6-6

JR中央線・地下鉄東西線
有楽町線・南北線・大江戸線
各線の飯田橋駅から徒歩8分

集合

正門前 11時

昼食

各自持参但し食堂あり

句会場

正門横「涵徳亭」

句会

13時30分～15時30分

出句数

囑目3句

費用

交通費・入園料(300円)各自
会場費その他は参加者均等割り



5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。